

グレアム・グリーンの『自伝』(A Sort of Life) について

On A Sort of Life by Graham Greene

岩 崎 正 也
Masaya Iwasaki

1

「地下室」(‘The Basement Room’)はフィリップ少年が生を発見するところから始まり、死を体験するところで終る。その生と死の領域を分ける鍵は、ラジャ張りのドアのもつ両義性にあると考えられる。それは、少年が、ラジャ張りのドアを通過するときに、子どもの世界から大人の世界へ移行すると同時に生と死の間を往復するからである。

どの部屋にも入って、どの部屋も人気がなかった自分の家にいるのに知らない所へ来たようであった。⁽¹⁾

また、『内なる人』(The Man Within, 1929)は、アレドルーズが死に向かうところで終るが、その生と死の境界は森の中の一軒家であって、そこを出入りすることによってアンドルーズは、押花と摘草の母の世界と暴力の父とで形成されている幼年時代と、大人の成熟との間を往復するとともに、その家に住むエリザベスを仲介者として「追われる」から「追う」へと転化する。

グリーンは『喜劇役者』(The Comedians, 1966)の中でブラウンに「作者にとっては人生の初めの20年が生涯全体の体験を含み、その後は観察であるといつも言われているが、そのことはわれわれすべてにも等しく当てはまると思う⁽²⁾」と語らせているが、この認識に従って、フィリップとアンドルーズの2人はグリーンの小説世界の中で幼年時代の喪失によって生涯を支配されるすべての主人公たちの原型として創られている。

グリーンが「若きディケンズ」(‘The Young Dickens’)の中で、「作家というものは少年時

代と青年時代に自分の世界を決定的に把握するもので、それ以後の全生涯はその独自の世界をすべての人々に共感してもらえようという偉大な公的⁽³⁾世界の言葉で描いてみせようとする努力である」と述べて、現実認識の論理が小説世界の論理構造を支配することを認めている以上、私たちはフィリップやアンドルーズが佇む境界の意味を解くために、幼年期にグリーンが抱いた現実の境界線上の二重意識がどんなふう⁽⁴⁾に生じたのかについて考えてみなければならない。

2

グリーンは、自伝が自己の臨終を取り扱うことができない以上、「どんな結末も恣意的なものにならざるをえない」と言う。したがって、『自伝』を自己の26歳から28歳ころまでの3年間に味わった失意の時期で閉じたのも、「失敗もまた一種の死」だからである。

グリーンは自伝の中で生涯での最初の記憶を二つ次のように記している。

私の最初の記憶は、丘の頂きで乳母車の中に坐っていて、足下に死んだ犬が1匹いるということである。⁽⁴⁾

小さな家が並んでいるその中の1軒に人だかりがして、1人の男が群れをとび出し、家の中へかけこんだ。その男が喉を切ろうとしているのだと教えられた。⁽⁵⁾

グリーンが自伝の冒頭を、一種の死の発見で始

めたことは、私たちが自伝を貫く制作原理を知る上できわめて暗示的である。というのは、『自伝』に流れるある種の生の在り方を探ることが、幼年時代における作者の現実認識の構造とその反映である小説作品に表れるさまざまな死の風景を解く鍵になると考えられるからである。

作者の66歳のときに上梓された『自伝』の前半はパブリック・スクールと家庭での生活から、また後半はオックスフォード大学時代の体験と、卒業後、「ノッティンガム・ジャーナル」紙と「ザ・タイムズ」紙に勤務したときのジャーナリスト時代の印象および作家として出発したころの体験で構成されている。その個人的な記事の多くがそれまでの『オールド・スクール』(*The Old School*, 1934)、『地図のない旅』(*Journey Without Maps*, 1936)、『掟なき道』(*The Lawless Roads*, 1939)、『失われた幼年時代』(*The Lost Childhood and Other Essays*, 1951)などの自伝的エッセイの内容と重複しているのは、『脱出路』(*Ways of Escape*, 1980)の序文に従えば、「彼ら(=他の人々)にだってプライバシーにたいする権利はある。そして、自分のことを書こうとすれば、必然的に彼らをも巻き添えにすることになる」からであって、作者はなお多くの秘密を守っているように思われる。

自伝の主人公であるグレアムは、たとえば2児の父親としてではなく、作者の厳しい選択の視線によって見つめられた若き作家として登場する。イアン・グレゴール(Ian Gregor)は、「ページを戻し始めると、この本については何かとくに厄介なことがあるように思われる。ここ30年間、表紙の陰からそうしてきたことだが、グリーン⁽⁶⁾氏の顔が謎を含んで私たちを見つめているようだ」と言っているが、私たちは書かれたグリーン⁽⁶⁾の他に書くグリーン⁽⁷⁾の厳しい選択の視線、つまり演技するグリーン⁽⁷⁾の存在を意識し始めるのだ。そのためにグレゴールは、小説家が「自伝を書くということが自己の生涯を形成しなければならぬ」という必然性に従った、一種の自己発見⁽⁷⁾である点で、*A Sort of Life* を a sort of fiction であると規定している。

『自伝』にはグリーン自身に関する記事がほぼ年代順に配列されているけれども、読者が最も知

りたいはずのカトリックへの改宗とか妻と子どものことというような日常の関歴はほとんど排除されていて、グリーン⁽⁸⁾の創作力を掻きたてる「幼年時代、倦怠、反復的な失敗の意識」などのオブセクションの心象風景ばかりが充満しているのは、自伝が「伝記より事実の誤りは少ないかもしれないが、事実の選択が必然的に一層激しくなる」からである。

今、グリーンに関する第三者による客観的な伝記の制作が進行中であるという。非カトリック教徒であるアメリカ人のノーマン・シェリー(Norman Sherry)がグリーン⁽⁹⁾の足跡を求めて世界中を飛び廻っている。高見幸郎氏によれば、シェリーは、すでに日本へもやってきてグリーン⁽⁹⁾の資料を調べて行ったが、その「野心的」な伝記はグリーン⁽⁹⁾の生前に出版されることはありえないという。

3

「狭い一つの場所にいる17人ものグリーン⁽¹⁰⁾の数は今日でさえ人々の割合からいうとひどく高いように思われるし、また休暇のときになるとその人数は100人の4分の1近くになることがあった」というグリーン一族の繁栄は、弟のヒュー・グリーン⁽¹⁰⁾の伝記『さまざまな人生』(*A Variety of Lives*, 1983)の著者マイケル・トレーシー(Michael Tracey)によると、曾祖父のベンジャミン・グリーン⁽¹⁰⁾がビールの醸造業を他人から引き継ぎ、後に妻の父からセント・キッツ島にある広大な砂糖農園を購入したときに遡る。次の祖父の世代は、ビール醸造業の他にロンドンの金融界と土地所有とセント・キッツ島のロマンティックな生涯とを合わせ持ち、さらに父親の世代は富の上に、社会的な名声と知性とを獲得した。⁽¹¹⁾その結果、ブラジルのコーヒー農園で財を成した父の弟のエドワード・グリーン⁽¹¹⁾の家族が金持ちのグリーン⁽¹¹⁾、そして父の一家がインテリのグリーン⁽¹¹⁾と呼ばれるようになった。

グリーン⁽¹¹⁾の父チャールズ・ヘンリー・グリーン⁽¹¹⁾はいとこのメアリアン・レイモンド・グリーン⁽¹¹⁾と結婚し、4男2女を儲ける。モリー、ハーバート、レイモンド、グレアム、ヒュー、エリザベスと続

くのだが、グレアムは3男として1904年10月2日、ロンドンの北西26マイルの所にあるハートフォードシャー州のバーカムステッドの町に生れる。父は当時バーカムステッド・パブリック・スクールのセント・ジョン寮に寮監として住んでいた。6歳のときに父が校長になったので、一家は校長公舎に移るが、13歳のときにグリーンは寮生として再びセント・ジョン寮の中で暮らし始める。

グリーンも6歳年下のヒューもともに学校と寮生活についてその恐怖と残虐さを指摘しているが、父チャールズは行政手腕を発揮した進歩的な校長だった。

1911年から1924年までの13年にわたる校長在任中のチャールズ・グリーンは、『バーカムステッド校史』(A History of Berkhamsted School 1541-1972)に従って次のように要約することができる。

第一次大戦前には、前任者からの懸案であった新しい屋外運動場の用地買収と、サナトリウムの新設を断行し、戦後は、学校の敷地獲得の他に、文化的学校行事として外部から商業劇団を招いて公演を行わせた。これを契機として校内の寮ごとに生徒の演劇サークルが生れ、1926年には校内の演劇6団体による合同公演が行われるほど文化活動が盛んになる。⁽¹²⁾「代々チャールズ・グリーン型の校長がいたとしても、学校はたぶんあまり繁栄しないだろう。しかし、バーカムステッド校は、そういう特定の校長がいたおかげで今日でも秀れた所になっていることは間違いない⁽¹³⁾」と称えながら校史はチャールズ・グリーンを閉じている。

一方、グリーンは編纂による『オールド・スクール』の憶い出の記によれば、グリーン自身も校長としての父にたいしては尊敬の気持ちを表し、「賞賛に値するほど進歩的な校長であり、在職期間の晩年ほど進歩的であった時期はない⁽¹⁴⁾」と記し、また、親としての父についても、結婚して子どもを持ったときに初めて埋れた愛と悲しみを意識したと述べている。しかし、これらはどちらも寮生活の恐怖によって惹き起された自我の分裂を克服できるようになり、また「落ち着いた熱意のある真摯な態度の持主」である父を理解できるようになった成人後のグリーンは理性的な解説であ

る。少年のグリーンの意識はむしろ父の愛情にたいし苦痛を感じたり、逃避感情を抱いていて、「Xさんの家では楽しかったかね」とか「コンサートは早く終らなかったのだね」というような質問にいらいらさせられ通しだったし、父に褒められると「すぐに手近かにあるテーブルの下にもぐりこんだ⁽¹⁵⁾」という。

一方、母親の子どもたちにたいする愛情も父親に劣らず距離を感じさせたが、グリーンにとっては、母は父のような当惑させる質問をしないだけ身近かに感じられたという。

母親のメアリアン・グリーンは姪から、「たいへん美しく、気品があるけれどもつねに一番の権威者だ。ちょっと冷淡で私たちはみなおばを怖がっていたと思う。おばはいつも自分が正しいと疑わなかったし、それがおばと子どもたちの間の壁になったと思う。また、たいへん冷静でお高くとまっていた。自分の子どもたちにさえも、一番幼いヒューやエリザベスにたいしても⁽¹⁶⁾」と言われていたが、メアリアンの子どもの愛情と几帳面さは、その育児ノートに子どもの発育状況と病歴を綿密に記していることに伺われる。グリーンはそのノートのことに触れて、「あの中で母は私が何歳で歩き始めたとか、子どもの病気などを記入し始めていた⁽¹⁷⁾」と述べているが、トレーシーによれば、「この念入りにつけられた赤ん坊の記録は、育児にたいする点だけでなく、そういう世話をやくときの系統だてとか、整頓のよさをも示す証拠である。メアリアンはいとおしくらい丁寧の一つ一つのエピソードを詳しく書き留めたけれども、このことは自分の子どもたちとの関係に厳格さを持ちこむことになったただだ。それは遠い所からの愛情だった⁽¹⁸⁾」ので、ヒューの感情は「見られているという恐怖と、愛されている喜び」の間を揺れ動いたという。

この疎遠な親子関係の原因の一端は上記の父と母の性格にあっただろうが、また、当時のグリーン家の特殊な家庭環境にもあったと考えられる。つまり、父は校長兼寮監として二、三十人の寮生の監督をしなければならなかったし、母は乳母を含めて6人の使用人を雇っていたため、子どもたちは必然的に大部分の時間を両親から離れて、乳母といっしょに過していたからである。

入学前の子どもたちの日課はトレーシーの記事に基づいて次のようにまとめることができる。

- (1) 朝、子ども部屋で朝食をとり、そこで過す。
- (2) 午前11時頃、下へ降りて母親といっしょに過す。
- (3) 昼食を子ども部屋でとる。
- (4) 午後、乳母や子守り女中といっしょに散歩に出る。
- (5) お茶の時間は子ども部屋で乳母といっしょにいる。
- (6) その後、応接室で母親から本を読んでもらう。
- (7) 夕食、就寝⁽¹⁹⁾。

この一連の儀式が毎日続くのだが、幼いグレムはある日の午後、散歩をしているときに、犬の死骸と男の自殺を見て、「死」を発見したのである。

当時、子どもたちは近づきたい父を避けて同じ町にある金持ちのおじのグリーン家に入出入りしていたけれども、成人したグリーンはこの疎遠な母子関係を「当時の教育システムの一部だった」と割り切り、寮生になるまでの少年期の家庭生活を幸福な状態だったと回想する。

グリーンの自我の分裂と不幸はセント・ジョン寮に入った13歳のときに始まる。グリーンが病的な自我の分裂に陥り、生涯にわたる二重意識に捉えられるようになったのは、一つは寮生活の恐怖と残酷さを味わったからであり、二つ目には、「子」の世界からも「大人」の世界からも切断されたフィリップ少年のように、校長である父と寮長である次兄レイモンドによって代表される体制側と、それに反抗する下級クラスの級長であるいとこのベンに率いられる反体制側の間にあってどちらにも帰属することができなかったからである。

騒音、咳、鼾、放屁から逃れられない寮の夜、鍵のないトイレ、自習室がないこと、外出の際には複数の仲間と行く、校地内では帽子着用という規則に縛られ、精神的な拷問者カーター、コンパスで拷問するコリファクス、三重のくびれた顎のクランドン先生、芸術写真蒐集家のパーローの存在にたえず脅やかされたことが、『オールド・スクール』を初め、いくつかの自伝的エッセイの中に繰り返されている。

冬の夜、教師が立ち去った後の寮の一室にいて

上級生が弱い下級生の腕や脚をラジエーターの上に押しつけるのを見た弟のヒューは、「今も犠牲者の金切声と拷問者の笑い声とが聞こえ、焼けた肌の匂いがする⁽²⁰⁾」と言う。こういうさまざまな悪習や弊害が、バーカムステッド・スクールに限られたことではなく、伝統的なパブリック・スクールに共通に見られる現象であることを認めた上で、グリーンは、「大きな寮にいと、眠りについても15分たつかたないうちに、だれかが鼾をたてたり喋ったりする。こういう避けられない極端な共同生活はだれにとってもよいはずがない⁽²¹⁾」と寄宿制度そのものを糾弾している。

校長である父の子であるという立場はグレムにだけ限られたものであって、それが2種類の忠誠心をグリーンに押しつけ、父の傀儡政権とレジスタンス勢力の間にはさまれたクヴィスリングの弟であることを意識させた。寮生活の不潔と残酷——これがグリーンの知覚した悪の風景であるが、グリーンは悪が同時に自己の内部にも存在することを認識したはずである。自身が「レジスタンスの勢力に包囲されて、しかも父と兄を裏切らないで彼らの仲間になることはできなかった⁽²²⁾」からである。しかもその悪の実感が罪の意識と微妙に結びついていたのではないかと考えられる。その点を説明するヒントとして悪の発見からカトリックへの改宗による救いに至る体験を心象風景として描いた文章を『掟なき道』の中から採りあげてみたい。

それは救いの1時間だった。また祈りの1時間でもあった。神を強く意識した。時間が宙ぶらりんになって停止する。音楽が空中に漂った。国境の向うの人ごみの中へ入らなければならないまでにはどんなことでも起きるかも知れない。どこにも避けて通れないという必然性はなかった。信仰は山を動かすくらいに大きくなっていた。大きな建物は暗闇の中で揺さぶられた。こんなふうに信仰がやってきた——形にとらわれずに、教義も示さずに、クロッケーの芝生のあたりにある気配として、道の向う側にある暴力や、残虐さや、悪と結びついたものとしてやってくる。私は地獄の存在を信じたから天国の存在を信じるようになった。しかし、永いことははっきりと身近かに描くことができたのは

地獄だけであった。⁽²³⁾

国境の雰囲気は最初からやり直す場合のそれに似ている。気持ちのよい告白のようなところがあり、罪と罪との間にあってしあわせなちょっとした時間を宙に浮いているようなものだ。国境で死ぬと、人はそれを「幸福な死」と呼ぶ。⁽²⁴⁾

この文章は寮生活での悪の発見から成人後のカトリックへの改宗による救いに至る体験の告白である。前半の描写はセント・ジョンの寮生になった13歳のグリーンが寮と家の両方から逃避してクロッカーの芝生の陰に潜んでいるときの心象風景であるが、私たちはこの複数の時間相の重なり合う風景の描写に眩惑されそうになる。山形和美氏は、「この文章はまことに巧妙である。人はこの巧妙さにしばしば欺される。ここにあるのは13歳のグリーンではなく、35歳のグリーンである。13歳のグリーンが感じたものは『暗闇の中での悲哀にみちた幸福感』であり、両世界のどちらからも解放された安らぎのひとつが引き裂かれた自意識の調和をもたらすときの瞬時の充実感であった。またそれのみであったはずである⁽²⁵⁾」と書いて「残余」の信仰体験は22歳のときのカトリックへの改宗以後の風景であることを論証している。

死を通過することによって再生に至る鍵を探り当てるという逆説を幼年時代への遡行を通して示す点で、グリーンが59歳のときに出版した『現実的感覚』(A Sense of Reality, 1963)の中の一編である「庭の下」('Under the Garden')の制作原理を持ち出せば、この心象風景の時間相を整理することができるだろう。

「庭の下」は不治の病に冒され、死を覚悟した男が、幼年時代に見た宝探しの夢を回想を通して再現することによって、幼年時代を見つけ、「子」を再び生きることによって、「生」に希望を抱く物語である。そこには、宝探しの冒険の夢(第1部第5章)の時間と、回想(第2部)の時間と、現実の島を訪ねる時間との3重の時間が交錯する。つまり、7歳の少年の夢の時間と57歳の大人の回想の時間と、50年にわたって夢の意味を追ってきた現実の時間との3層からなる時間の流れによって構成されている。

この時間相に従えば、前半の記事の前段には13歳のグリーンが家庭と寮の双方の世界から逃れて国境のクロッカーの芝地に潜みながら悪の存在を認識する時間があり、「残余」の後段には22歳のときのカトリックへの改宗を経て31歳のとき、リベリア旅行の途上で「生」への信仰を回復するまでの永年にわたるさまざまな「死」を体験する時間と、リベリアで再生を知覚する時間との3重の時間が流れる。そして後半の文章には、カトリックの布教を禁じているメキシコへ旅立つ前に、アメリカとメキシコの国境に佇む34歳の作者が境界上の二重意識を図式的に説明する回想の時間が流れる。「最初からやり直す場合のそれ」は、リベリアで味わった再生への希望であり、「罪と罪との間にあってしあわせなちょっとした時間」は、グリーンがクロッカーの芝生で味わった孤独の喜びであり、フィリップ少年の絶望感である。

さらにこの文章の中で、やっと生への救いを獲得した34歳のグリーンは、数々の死の恐怖を克服する以前の永年にわたる悪の認識の低音部に罪の意識があることを洩らしている。したがって国境を挟む二重意識の対立関係は、フランシス・ウィンダム (Francis Wyndham) が小説作品のモチーフである「追うもの」と「追われるもの」の対立について、「警察による犯人の追跡、欺かれた人々による裏切り者の追跡、迫害者たちによる犠牲者の追跡。それは神による人間の魂つまり内面の自己の追跡を象徴する。人は平和を探し求めているときに追いつめられるが、その平和はしばしば死の中にしか見出されない⁽²⁶⁾」と述べているように、人と人との間の水平的関係での対立であるだけでなく、神と人との間の垂直的関係での対立であるという二重構造をもつ。この関係は、その後の制作の途上でさらに発展し、『ブライトン・ロック』(Brighton Rock, 1938)の中ではアイダのhuman 'right and wrong'の水平的関係とロウズのdivine 'good and evil'の垂直的関係の場とに二極分化を起こす。そして両者は物語の結末に至っても交叉せず、反撥、対立を続ける。

このようにして「地獄の存在を信じたから天国の存在を信じるようになった」という信仰告白には、13歳のときセント・ジョン寮に入って以来抱き続けた悪の認識に始まり、22歳のときのカトリ

ックへの改宗を経て31歳のリベリアでの再生体験に至るまでの20年近くにわたる生—死—再生の時間が流れ、二重構造としての現実認識の生成、発展の推移が窺われる。また寮生時代の罪の意識と結びついた悪の認識の中には、後年の二重構造としての現実認識の予兆が色濃く漂う。

グリーンと同級生で16歳のときに2人で墓石の上に腰かけて『イエロウ・ブック』を読む間柄であったピーター・クネルは当時を振り返り、「学校は退屈で町は単調であると記憶している」と言うものの、「グレアム・グリーンが発見した悪の低音部は私の鈍感な精神にたいして何の印象も残していないで、しばしば単調な環境に嫌気がさしたけれども、その嫌悪感が罪の意識と結びついたことは一度もなかった」と2人の認識の違いを示している。この相違は、両者の性格の違いというよりはむしろ、校長の子としての不可避な意識の有無の違いから生じたものであろう。後年、作家として生涯にわたって登場人物とともにイノセントな幼年時代探求の旅に出るグリーンは『自伝』の出版に先立つ12年ほど前に学校に係る小説に着手するため、セント・ジョン寮を再訪したが、残酷な寮生時代の時間を再び生きることには堪えられずに制作を放棄したという。学校生活にたいしてグリーンよりもうまくつき合うことのできた弟のヒューでさえも、後年、「列車がパークムステッドに近づくにつれて、学校に戻ろうとするかのよう⁽²⁶⁾にひどく気が重くなる」と言っている。

4

さらに、グリーン⁽²⁷⁾の二重構造からなる現実認識の形成に大きな影響を与えたのが読書体験である。「いったい、われわれは生れてから14年の間に本の中から味わった興奮や啓示に等しいものを今の読書体験から得ているだろうか」と幼年時代の本をすべて易断の書と断定しているグリーンは寮生活の恐怖の体験と前後して読んだおびただしい書物のうち、とくに『ソロモン王の洞窟』(King Solomon's Mines, 1885)と『ミラノの毒蛇』(The Viper of Milan, 1906)の2冊を通して決定的な人生観を見出した。

10歳頃に読んだ『ソロモン王の洞窟』によって、「魔力こそはこの作家が駆使するもので、30年の歳月でさえも摩り切れさせることができないような絵をわれわれの心の中に嵌めこんだのだ⁽³⁰⁾」と言うほどアフリカ熱を掻き立てられたグリーンは、19歳のときオックスフォード大学卒業前にナイジェリア海軍に勤めるため、領事試験の口答試問を受けて合格する。31歳のときには、いとこのバーバラを連れて約40日にわたるリベリア旅行を試み、1941年には外務省の派遣により、ナイジェリアのラゴスに3か月間、シェラレオネのフリータウンに1年間滞在する。さらに1959年にはベルギー領コンゴへ取材旅行に出かける。

しかし、『ソロモン王の洞窟』はグリーンに最終的な満足感を与えはしなかった。それは、クアアナ国へソロモン王の宝探しに出かけるヘンリー・カーティス男爵一行が数々の苦境に際していつも沈着、冷静、勇敢な行動をとったため、主人公の存在感が薄かったからである。翌朝、クアアナ国王の大軍を迎え撃つ先王の正統な後継者であるインクブを擁立する反乱軍に加勢する主人公たちは月光に照らされる夜営の陣にいて明日の運命を思う。

「しかし、運命は勇者に味方するものだから、維持すべき名声があるからには事態のまただ中に入る必要がある」。彼はこの最後の言葉を悲しい声で言ったが、その眼にはもの悲しさとは逆の輝きがあった。ヘンリー・カーティス卿は本当は戦いが好きなのではないか。⁽³¹⁾

しかし魔女ガグルルだけはリアリティを持ち、グリーン⁽²⁸⁾の心象風景の一部として生涯つきまとうことになった。

魔女は下敷きになった。—あっ、たいへんだ、遅すぎたのだ。岩が女を押えつけ、女は苦悶の叫び声をあげる。30トンもの岩が下へとおりてきて、じょじょに老いたその体を下の岩床に押しつぶす。これまでに一度も聞いたことのないような悲鳴があがり、気味の悪い長くばりばりと骨が碎ける音、すると扉がしまり、通路をかけおりたときにはわれわれは扉に突きあたって

しまった。³²⁾

14歳のときに学校の図書室から借りて読んだマージョリー・ボウエン (Marjorie Bowen) の『ミラノの毒蛇』は2つの点でグリーンの人生観を決定する。一つは、ミラノ公とヴェローナ公が覇権を争い、ミラノ公の残忍さがヴェローナ公の誠実さを破る物語の中に、直観として読みとった「人間性は黒と白とからなるのではなく、黒と灰色とからなる」³³⁾という悪の認識が寮生活での体験を裏付けたことである。もう一つは、この作品がグリーンに作家としての生涯を選択させたことである。グリーンは『ミラノの毒蛇』の結末から、「勝利のあとに控える破滅の意識、つまり運命の振り子が反転しようとする感覚」を人生における真理として味わう。ミラノ公ヴィスコンティの陰謀によって自国の領土と最愛の妻とを失った狂乱のヴェローナ公デラ・スカラは、単身ヴィスコンティの陣営を襲うが、多勢の兵士に斬り殺される。ヴィスコンティは続々と集まる勝利の朗報に聞き入るが、その勝利が完成しようとするときに、書記のジアノットの裏切りによって刺される。「庭園は荒れすさび、叫び声に充満した混乱の場となった。その知らせは野火のように拡がった。みんなが自分勝手に考え、動いた。そして復讐の手先となったジアノットは膝をかがめて鼻をくくんいわせた」³⁴⁾という勝利の後の破滅の風景から味わった振り子の反転の運命が真理であるということをグリーンは作家の生涯の中でも体験する。

5

「死」を発見することによって生を始めたグリーンが『ミラノの毒蛇』を読んで「人間性が黒と灰色とからなる」ことを直観し、周囲を見まわして善が悪を孕むことを意識したときに、それ以後生よりも死にたいして強い関心を抱いたことは容易に理解できるだろう。学校と家庭の両方の世界から逃避行をくり返すグリーンは、倦怠の恐怖を克服するために数々の死の体験を試みる。19歳の初秋に、兄の所有する拳銃を偶然に見つけ出し、ロシア式ルーレットに基づいて6つの薬室の1つ

に銃弾をこめて、銃口を右の耳にあてて引金をひいた。6対1の生死の確率により、弾が出ず、グリーンは生を与えられる。6回目の「死」に失敗したときにこの実験を中止したという。また22歳のとき、地下鉄の駅でとび込み自殺を図ろうとしたが、またも「死」に失敗する。自殺はロシア式ルーレットよりも勇気が必要としたからという。『自伝』の結末は、第4作の『スタンブール特急』 (Stamboul Train, 1932) が版元のハイネマン社の圧力によって一部書き直しを命じられたものの、一万部以上の印刷部数による成功を作者にもたらしたところで終る。しかし、この成功がハッピー・エンディングでもなく、作者が「失敗」に失敗したことにもならないのは、グリーンが直観した振り子の反転の認識に従えば、「作家にとって成功は常に一時的であり、成功とは単に遅れてくる失敗に過ぎない」³⁵⁾からである。

こういうわけで、自伝に登場するグリーンはクェネルのいう「18世紀のイタリアの即興喜劇に出てくるやや悲しそうな仮面の下に冷笑的なユーモアを大いに発揮する能力を隠しているピエロ」³⁶⁾として、ときにはバーバラ・グリーンが見た「科学者が標本を検査する」³⁷⁾ように、背後に隠れた作者自身を演じている。死の発見に始まり、暴力、裏切り、悪、恐怖などを知り尽して死へ到達する体験を通して「地獄の存在を信じたので天国の存在を信じるようになった」という逆説的なグリーンの認識方法に従えば、『自伝』は生が必然的に孕む死のイメージに充たされているという点で、グレゴールが a sort of fiction と呼んだのと同じ観点から『自伝』を a sort of death と言い換えることができる。

アントニー・バージェスとの対談で、いつノーベル賞をとるのか、ときかれたグリーンが、以前にも同じ質問を受けたとき、もっと大きい賞をもらいたいものだったと答え、何という賞かとの問いに、「死」と言ったところに、自己の生をも a sort of death のイメージで統一しようというグリーンの意図が表れている。

註

- (1) Graham Greene, *Collected Stories* (London: The Bodley Head & William Heinemann, 1972), p. 457.
- (2) Graham Greene, *The Comedians* (London: The Bodley Head & William Heinemann, 1976), p. 69.
- (3) Graham Greene, *Collected Essays* (London: The Bodley Head, 1969), p. 106. 前川祐一氏訳.
- (4) Graham Greene, *A Sort of Life* (London: The Bodley Head, 1971), p. 14.
- (5) *Ibid.*, p. 16.
- (6) Ian Gregor, 'A Sort of Fiction,' *New Blackfriars*, 53 (March 1972), pp. 121-122.
- (7) *Ibid.*, p. 120.
- (8) Greene, *A Sort of Life*, p. 9.
- (9) グリーン『逃走の方法』(高見幸郎訳、早川書房、1985), pp. 291-292.
- (10) Greene, *A Sort of Life*, pp. 14-15.
- (11) Michael Tracey, *A Variety of Lives* (London: The Bodley Head, 1983), pp. 3-4.
- (12) B. H. Garnons Williams, *A History of Berkhamsted School 1541-1972* (Aylesbury, Bucks.: Hazell Watson & Viney Ltd, 1980), pp. 233-254.
- (13) *Ibid.*, p. 255.
- (14) Graham Greene, 'The Last Word,' *The Old School* (London: Jonathan Cape, 1934), p. 248.
- (15) Marie-Françoise Allain, *The Other Man* (London: The Bodley Head, 1983), p. 32-33.
- (16) Tracey, *A Variety of Lives*, p. 5.
- (17) Allain, *The Other Man*, p. 32.
- (18) Tracey, *A Variety of Lives*, p. 6.
- (19) *Ibid.*, p. 7.
- (20) *Ibid.*, p. 12.
- (21) Greene, 'The Last Word,' pp. 251-252.
- (22) Greene, *A Sort of Life*, p. 72.
- (23) Graham Greene, *The Lawless Roads* (London: The Bodley Head, 1978), pp. 2-3.
- (24) *Ibid.*, p. 13.
- (25) 山形和美『G・グリーン』(冬樹社, 1977), p. 15.
- (26) Francis Wyndham, *Graham Greene* (London: Longmans, Green & Co., 1955), p. 6.
- (27) Peter Quennell, *The Sign of the Fish* (London: Collins Clear-Type Press, 1960), pp. 61-62.
- (28) Tracey, *A Variety of Lives*, p. 12.
- (29) Graham Greene, *The Lost Childhood and Other Essays* (London: Eyre & Spottiswoode, 1951), p. 13.
- (30) Greene, *Collected Essays*, p. 209.
- (31) H. Rider Haggard, *King Solomon's Mines* (London: Blackie & Son, Ltd., 1961) p. 151.
- (32) *Ibid.*, p. 211.
- (33) Greene, *The Lost Childhood and Other Essays*, p. 16.
- (34) Marjorie Bowen, *The Viper of Milan* (London: The Bodley Head, 1960), p. 300.
- (35) Greene, *A Sort of Life*, p. 215.
- (36) Quennell, *The Sign of the Fish*, p. 62.
- (37) Barbara Greene, *Too Late to Turn Back* (London: Settle and Bendall, 1981), p. 6.